

投票行動の心理と論理

橋 本 彰

(1)

やれどわれわれ Franz Alexander : Emotional Factors in Voting Behavior, Richard E. Renneker : Some Psychodynamic Aspects of Voting Behavior, C. W. Wahl : The Relation Between Primary and Secondary Identifications ; Psychiatry and the Group Sciences. の三編の論文をとりあげ考察を試みておいた。⁽¹⁾ これらはいずれも政治選択にかかわるパースナリティの問題を直接その主題とし、一九五九年に E. Burdick と A. J. Brodbeck が共同で編纂した American Voting Behavior と題する投票行動研究書に収められていたものである。⁽²⁾ 何故われわれがあげてこのような試みをなしたかという理由は、一つには、次のような共編者の主旨に触発されたためである。⁽³⁾ すなわち、投票行動研究という領域においては「パースナリティと政治選択」をそのテーマとするものが稀有であることから、この方面の学問

分野における諸觀念の“interdisciplinary”な交換を行ない、もって研究の引照基準の拡大をはかることによって、斯学の将来にたいしインストラクティブであるような示唆をもとめようということである。だがこのことと同時に、一方では、例えば The People's Choice, The Voter Decides, Voting などの投票行動研究書が、人間に特有の（政治的）意見形成という問題によくふれることがなかったということに端を発し、すすんで投票行動にかかわる個人の心性にかんし、いかなる論議がなされているかを探索してみようというためでもあったのである。⁽⁴⁾

一般に選択とは、ある目的ないし善なることがらにかんして保有する見解によって決定される。投票行動もまた一つの選択行為であるから、それは投票者自身が目的としたり善となしたりしている見解にしたがうものと考えられる。思うに、人間をして政治的動物たらしめるものは、かように人間のみが（政治的）意見を形成する能力を有していることとである。したがって、このような意味をもつ投票行動という政治的行動を、The People's Choice のごとく、ひたすら下—政治的条件に還元しざるならば、その試みは人間に特有の、この意見形成という能力の意義を否定しざるにひとしく、また、Voting の記述のごとく、有機体すなわち投票者は選挙運動という刺激をうけて投票という反応をしめすにいたる、という論をなすならば、そのとき、人は他から動かされることによってのみ行動する、inert な客体であるということを含意することになる。したがって、前稿において、われわれは意見形成の隠微なるものにたいしアプローチするという意図のもとに、頭書のごとく F. Alexander, R. E. Renneker, C. W. Wahl という三人の精神医学を専攻する学者の手になる論文をとりあげ、これらの点について考察をすすめる手がかりとなしたのである。這個の三人の研究者の論点を要約すればおよそ次のようにいえるであろう。

F. Alexander は、いわゆる「独自の投票を行なうもの」「independent voter ないし」「協道にそれた投票を行なうもの」「deviant voter」をその研究対象として選別し、これらの投票者の心理のうち、とくに無意識的動機ないし前意識的動機にかんする考察をおこない、そこから、人の投票行動は、根本的には、候補者という人物にたいする attitude および経済的ないし理念的イッシュューにたいする attitude という二つのカテゴリーの attitude によって決定される、という論をなす。一方 R. E. Renneker は、心理分析ないし心理療法をうけた四二人の患者の診療記録を検討することを通して、患者の投票の歴史と支配的な両親の歴史とのあいだには、常にある種の意味のある関係があったとし、大統領ないし大統領候補者は、ふつう無意識的なものによって父親代理としてみなされている、という論をなしたのである。そして、この二人の研究者と基調は同じくしながら、C. W. Wahi はバースナリティの大きな無意識という深部が、少なくとも行動のイニシヤティブをとるということから、さらにすすんで投票行動とは、もっぱら個人の行わないし法的な行為にとどまらず、肯定ないし抵抗の強力な形態である、という見解をしめすにいたるのである。われわれは、こういった精神医学者のおこなった事例研究を通して、人の投票決定の背後には多彩な情緒的背景が存在するということや、その影響力について示唆を得たのである。

思うに、民主政治においては、誰が政治をとるべきか、その政治のあり方はいかようにあるべきか、というすぐれた政治的な課題は、選挙という一つの通路をとうして決定される。そこから、われわれはある選挙制度が民主的である度合いを判定するには、次のような基準をもってすることができるといえよう。その一つは、いうまでもなく、このような政治的選択にたいし人々の参与が許されている度合いがこれである。そして、他の一つとしては、このようにして選出され公職

についた人々の資質をその照準とすることができるのである。というのも、公職につく人々を選出するということが、まずもって選挙の根本目的であるからである。だが、このとき、われわれがさらに一層の注意を払っておかなくてはならないことが存在している、すなわち、それはこのようにして選出された人々の資質は、部分的には、これら選出を行なった個々の投票者の資質に依っている、ということである。今日、投票行動研究にたいしてもとめられている要請にはさまざまなものがあるが、そのなかにあって、なお、閑却することができないのは、実にこの点にかんすることがらであると思う。

かつて J. S. Mill は⁽⁵⁾「投票とは（有権者の）自由裁量のきくといったものではない。人は（選挙権を行使して）個人的な欲望を処理するにあたり、判事が判決を下すがごとくなすべきである。厳密には、それは義務ということがらである」として、選挙権は投票者自らに属する権利というようなものではない、としたのち「人は最高の、最も良心的な、公共善にかんする意見にしたがってそれを与えるようにすべきである。それについて別の考え方をしている人は誰でも、選挙権をもつものには不適格者なのである。（そのような人が選挙権を有する）結果は邪しきものとなって、かれの精神を向上させることにはならない。すなわち、高揚せる愛国心とか公共の任務といった義務感にたいし心が開かれるかわりに、自己の利益や喜悦や気まぐれのために、一つの公的な機能を行使するというあの勝手気ままさが、かれのうちに目覚め育まれることになる。これらは一そう程度の悪い、専制君主や抑圧者を動かす感情や目的と同じものである」と述べた。思うに、この叙述は、われわれが上に記したことがらを、一つの側面からついたものといえよう。

III は能動的な性格は受動的な性格にまさるものであると主張していた。なぜなら、知力とか実行力とか道徳性とい

うごとき卓越せる人間精神の三つの態様は、まさしくこの能動的な性格によって促進されるはずだと考えたからである。この主張は、もし統治の形態の、性格におよぼす影響力を考慮にいれるときには、代議政治にとって有力な論拠を提供するものとなる。われわれは、Mill の議論の力点は人間精神の卓越性が代議政治をささえる必須条件であるとのべることにあつたとするよりは、むしろこういった人間精神の卓越性を促進する手段として、代議政治がすぐれた制度であるという主張をなすことにおかれていた、と知るべきであらうからである。だがしかし、もしそうであるとすれば、そのことは、かえって Mill の思索のうちに伏在しているかれの苦悶の姿を顕示させてしまうことになる。なぜならば、かれは「ほんとうの代議政治」を実現するための方策として、次のようなことがらを同時に提唱していたからである。

すなわち、国内における少数者の英知を確保するという目的のために比例代表制を採用すること、選挙資格を嚴重に制限するための知力判定を実施すること、および、すぐれた少数者にたいしては複数投票権を付与することなどであつた。そしてさらに、無記名投票制の弊害を論じてこれに反対の意向を表明してすらいるのである。かれは選挙への参加が人間の精神と感情の教育に資するものと考えた。それゆえ、一方では婦人をふくめた広範な普通選挙制度の実施を主張する。だが、このような論をなす一面で、デモクラシーの極端な進行にともなつて生起するであろう弊害を恐れていた。だから Bentham 流の数の強調にたいし、こうした、いわば質の強調をなさざるをえず、予想される弊害防止のための方策として上記のごときことがらを提唱したのである。思うに、このとき Mill の心の大きな部分を占めていたものは、健全なデモクラシーの実現という想念であつたといえる。

古来、政治哲学の目的の第一義とすることがらは、支配するものと支配されるものの性質を理解するにあり、ついでそ

の理解にてらして支配・被支配の関係の、すなわち政治社会の關係の、性質なり構造なりを理解しようとすることにあ
る。そのゆえか、一たび政治秩序にかんする想念の確立がみられると、それは人間にとって限りなく善であるばかりでな
く、さらには摂理的なものであるとまでされるのである。いわゆる、近代的な、經驗的な政治理論家のなせる論もまたこ
の例にもれない。

註(1) 拙稿、政経論叢 第三五卷 第三・四号 一頁～二三頁。

(2) Eugene Burdick and Arthur J. Brodbeck (ed.) : American Voting Behavior, 1959.

(3) *ibid.*, p. 2.

(4) 拙稿、前掲書 八頁。

(5) J. S. Mill : Considerations on Representative Government.

(二)

Voing の著者たちによれば、⁽¹⁾デモクラシーを論じた古典的理論家たちは、民主主義という政治体制における市民たるべきものの必ず具備すべき要件を設定していた、とされる。たとえば、① 市民は政治的なことがらについて関心を有し、これに参加すること、② 討論しうる能力とその慣行を有すること、③ イッシューズについての知識、すなわちその歴史性、適切な事実、代るべき提案、政党の立場、望ましき結果などについての知識を有すること、④ 自己自身の利益からだけでなく、同時に共通善という基準にもとずいて投票するという原則を自覚していること、⑤ さらに、合理的な判断を下して投票決定をおこなうこと、⑥ 社会的にも政治的にも同質性を保有しているとされること、などである。

ところが、かれらの Elmira における投票行動研究によると、住民たちは、現実にはこのようなチームで選挙にかかわることはなくその票を投じていた、とされるのである。著者たちによれば、政党の運動員ですら市民的義務に目覚めて活動していたのではない、またいわゆる「真の討論」がかわされることなどはいずれにおいてもほとんど存在しなかった、すなわち、候補者たちのあいだにおいても、新聞の論説のなかにも、選挙民と候補者あるいは選挙民同士のあいだにも、それはほとんど存在していなかった、そして Elmira の住民はイッシュューズにかんし充分な情報があたえられていなかったのみならず、政治的狀況を誤認しており、加うるに、その認識は感情によって彩られていた、かれらの多くのものは票を投ずるさいに、もっぱら習慣的に、かつ無思慮にこれをおこなっていた、とするのである。

こうした状態の觀察をとうして、著者たちは「民主的な政治制度がひたすら個々の投票者の資質（資格審査）に依存しているとするならば、そのとき、民主主義が何世紀にもわたって生きのこってきたというのは、驚くべきことのように思える。」とのべている。しかし、この言は著者たちの、民主政治にたいする絶望の表明では決してないのである。なぜならば、かれらはそれにもかかわらず、アメリカの民主主義は一つの健全な制度であって、生きのこり成長しつづけると信じているからである。それならば、いかなる社会的事実の觀察にもとずいて、あるいはそれをどのように理解することによって、著者たちはこのような政治的健全性の信念に到達することを得たのであろうか。

およそ古典的民主政治の理論は、個々の市民にあまり多くの資質を求めすぎたという点で誤まっていた、とかかれらは述べる。そして、これらのものは全体としての選挙民のうちに存在しているとしても、個々の市民たちは政治に参加するのに必要な知識を欠いていたり、関心を有することもなく、あるいは気がすすまないというのが実状なのである、しかしそ

うであつてもなお、これらもまた公共の利益に資するものとなるのである。したがって、政治的健康性にとって決定的に必要なことがらは、政治制度のうちにあるというのではなく、また個々の市民にあるというものでもない、むしろその双方が、その中であつて作動する環境や雰囲気を形成するところのある社会的特徴がこれなのである、そして、このような特徴はかつて政治理論家たちが注意深く考察してきたことがらではなかつた、とするのである。⁽³⁾ それならば、これらのいうところの社会的特徴とはいかなるものであろうか。

Voting の著者の一人である Berelson は、かつて The Public Opinion Quarterly で次のようにかいていた。⁽⁴⁾ 「共同社会の利益とは諸手続きにかなする一致にかかわるものなのか、あるいは外側の準則にかかわるものなのか（もしそうであるとすれば、それは何か）、あるいはさまざまな自己利益群がそれ自身バランスしてしまつたのちの残余の決定にかかわるものか、あるいは他の集団にたいする純粋な関心にかかわるものなのか、あるいは自己利益に課せられた抑制にかかわるものか、あるいはある集団の支配的な票からの偏向にかかわるものなのか。人がそのことをみつめればみつめるほど、ある一人の人の自己利益は他の人の共同社会の利益であるという形姿があらわれてくる。そして多くの人々は、互いがまともに同一化しているということがあらわれてくる……意見形成の時流の研究 (Elmira の研究) において、われわれは、この問題は共同社会における政治的分岐と政治的合意にむかつて作用する諸力というチームで分析すれば、一そう充分であるという結論に達した。民主政治の秩序の健全性は、これらの間のうまいバランスを達成することに依つてゐる。つまり、論議と行動を刺激するに充分な分岐と、歪みのもとにおいてすら社会を保持するに充分な合意、これである」と。この主張は Voting においては次のようにのべられている。⁽⁵⁾ 「同じように政治に必要とされる社会的合意と分岐

というのがある——結局のところブルリズムが必要なのである。このようなブルリズムは、そのシステムを保持するに十分な合意と、それを活動せしめるに十分な分岐を作りだす。合意があまりにはなだしすぎると、それは自由を失なわしめたり制限したりするであろう、一方、分岐があまりにはなだしければ、全体としての社会を破かいにいたらしめるものとなるであろう」と。

要するに、健全なる民主政治は社会的諸力のうみだすものであり、それはまたブルリズムのうちに存するのである。なぜならば、ブルリズムはそのシステムを保持するに十分な合意と、それを活動せしめるに十分な分岐をうみだすからである。Elmira の住民の投票行動の実態を観察することによって、また、それをかれら流に構想することによって、著者たちはこのような民主政治の健全性の想念に到達する。そのとき、住民たちのしめす無関心、アパシーですら、それが極端にながれさえしなければ政治的に健全な価値があり、社会的異質性もまた進歩と保守とのあいだのバランスを可能にする要件となる、政治の無視すら価値なきことではなく、すべては政治的健全性を構成する部分となる、というのである。思うに、このような Voting の著者たちのなせる論は、まさにアメリカ社会の現代的局面の記述であるといえる。しかしまたそれがゆえに、現代アメリカ社会の直面している重要な課題を、究極的解決に導くための処方を提示したものとはいえそうもない。すなわち、社会的異質性と大衆社会的・技術社会的な conformism ないし uniformity との関連性という問題や、常に潜在的な爆発性を有する人種問題にたいし、あるいは、異質性の危険を鎮静せしめるのに一役かっているアパシーが、高度に技術的な産業的な社会のもたらした富の結果であるとしても、それならばこのような富の獲得のために支払ってきた代償は何なのかということがらにたいし、そして最後に、このような諸問題と民主政治の健全性

との関係について、われわれの納得のゆく解答があたえられたとはいいいがたいからである。

ともあれ、かれらは、市民は共通善にかかわりをもって投票するということを強力に主張することはできない、とのべているのである。⁽⁶⁾ そのとき、この叙述の含意するところは、このような行為は健全な民主政治にとってはむしろ必要とするところではない、ということなのであろうか。かれらの述べることがらが、よしんば、そこまで意味するものではないとしても、少なくとも、市民は実質的な政治的争点にかかわって投票することはない、のであるし、しかも、それにもかかわらず民主政治の健全性は保たれる、ということになるわけである。かくて、民主政治の健全性とは、われわれのはかり知ることのできない何ものかによってみちびかれ、保有されるということになるうが、⁽⁷⁾ しかし、まさしくその点において、著者たちの論は民主政治における選挙の重要な意味を見うしなっていた、ともいえるのではないだろうか。

さきにものべておいたが、選挙を通して選出され公職についた人々の資質は、部分的には、これら選出をおこなった個々の投票者の資質に依るものである。われわれが、前稿において「パースナリティと政治選択」を直接その主題とする論を素材として、この点にかんする考察を試みようとしたのも、実にそのゆえだったのである。そして、Alexander, Reneker, Wahlらの精神医学者たちの手による投票行動の心理分析的研究は、いずれも、何故に人々はかれらがなすことき投票をなすのか、という問題にたいし non-rational な側面からの解答を探索しようとするものであった。そして、かつて Mill は民主政治の健全性を確保するための考察をいわば制度の側面より行なって、その実現のために前述のごとき着想を提示し、一方 Voting の著者たちは、社会のプルラリズムのうちに、それを実現せしめる自然の要因——分岐と合意——を見出だそうと試みていたのである。これにたいし、上記の三名の精神医学者たちは、投票行動の決定因を人間の

心理の内奥に求めようとする。だが、これらはいずれもかれらの専門とする心理療法的経験の範域にとどまっていたために、その論はあまりにも non-political にすぎるという印象をぬぐうことはできなかったのである。ともあれ、民主政治が選挙によって支えられている制度であるならば、その政治的健全性は当然に個々の投票者の資質の健全性に依拠することになる、といえようし、同時に、民主政治は市民の健全な資質を育くむ制度でもあるはずである。とするならば、われわれはここにおいて、この双方を連結する道すじにかんしいかなる論がなされているかを探索するという課題に直面することになる。

註(1) Bernard Berelson, Paul F. Lazarsfeld, William N. McPhee; Voting, A Study of Opinion Formation in a Presidential Campaign, 1954, p. 307~309.

(2) *ibid.*, p. 311.

(3) *ibid.*, p. 313.

(4) The Public Opinion Quarterly, Fall, 1952, p. 328.

(5) Voting, p. 318.

(6) *ibid.*, p. 309.

(7) David Truman; The Governmental Process と *group* の Potential Groups と *group* の概念を想起せしめる論といえまいか。

(11)

A. J. Brodbeck ⁽¹⁾ *vs* The Principles of Permanence and Change: Electioneering and Psychotherapy Compared と題する論文において、⁽¹⁾ therapeutic な原理の上に民主政治の理論を建設しようという着想をしめている。かれによれば、現

代における最も発達せる社会技術学 social engineering science は心理療法 psychotherapy であり、かつ、精神分析 psychoanalysis とは心理療法の臨床医によって生みだされたところの、最高に発達をみた理論と技巧である、とされるのである。一方、かれの見解では、選挙の研究は依然として極めて記述的なものとどまっております、しかも、その方面の研究は開始されたばかりのものであるから、いきおい選挙過程を制禦している法則を発見するのに、研究者はある種の「予感」に頼らざるをえないというのが現状である、とされる。したがって、もし選挙の研究のために、今日、最高に発達せる社会技術学である心理療法学 science of psychotherapy が産出してきた知識体を利用することができるとするならば、このことは斯学の発達のために大いに資するところとなろう、とする。⁽²⁾ こういった Brodbeck の主張を理解するために、われわれは、かれの議論を構成しているもののなかから、少なくとも二つの流れをとり出してしるしてみることが必要であろう。

(A)

はじめに、Brodbeck は投票行動を、人がある候補者や党との、第二次的政治的同一化 secondary political identification をとらして「自己」 the self を完結させるものとみなすのである。⁽³⁾ そして、投票という反応 voting response に、これをパースナリティの total act としてみることができるとした場合と partial act としてしかみることができない場合とがある。前者の場合には、人がある候補者や党を「買って」「これに協力しよう」としたり、あるいはそれと対抗している候補者や党を「拒否して」「排斥しよう」とするといった選択決定をなすさいに、その全人格・全所有を投入してこのことを行なうのであるが、後者の場合には、このように、人が全身全霊を打ちこんでなした選択決定というたぐいのものをみる

ことはできない、というのである。それゆえに、パースナリティの partial act としての投票が行なわれるときには、“自己”のある部分は後方にとどまって（投票という）行為を遂行するにあたり閉ざされたものとなってしまい、ために“自己”は不完全にしか realize されないことになる、というのである。

したがって partial act としての投票行動は、さきの第二次的同一化のなかで“自己”を明確化してゆくというパースナリティ拡大過程をふむものとはならない。そこでは、いわゆる“同一化の緊縮” *constriction of identification* という心理的メカニズムが作動しているのである。そして、この状態にある投票者は“わが党”について語るといことは決してなく、政治的には一匹狼にとどまることになるのである、その情緒は後退して、いわゆる“情緒的静寂主義” *emotional quietism* とよばれるような参与形態をとる。すなわち、いかなるものにも決して情熱をもったり、また、これをしめしたりすることのないようにする、あるいは情熱をもって行動するような人をきらう、というごとき形態がとられるのである。かれにとっては、候補者や党はもっぱら一つの“客体”としてでしか存在しない。それゆえに、その全人格が、候補者や党の敗退によって痛手をこうむったり、勝利のときには光彩をはなつて輝やかしいものとなる、ということは全くない。いかなれば、いかなるときにおいても、パースナリティの内面的切迫感ともいべきものをひきおこすことはないのである。

これにたいし、その投票行動が total act であつて完結性を有している場合は、候補者や党の勝利ないし敗退が、あたかも投票者自身が直接に勝利をかちとったり敗北を喫したりしたかのごときもの、となるのである。それゆえ、もし投票行動が“自己”の total act である場合、そのような投票者によって票が投ぜられ、そしてかれの望んでいる当選者の告

知をうけるや、かれは深い relaxation を得てその行為は完結にいたる。しかし、一方、それが partial act である場合、前者と同様の過程をふみながらも、ついに reaxation をみることはない、すなわちその（投票）行為は完結的であったとはいえないのである。

この点にかんして、Brodbeck は次のような婦人投票者の事例をあげている。⁽⁴⁾ この婦人は Eisenhower の第二期目の大統領選挙にさいして、かれに投票したのであるが、決して relaxation を得ることはなかった。そののみか Eisenhower の任期中、なにかにつけてこの投票を行なった日のことを想起するのであった。しかし Eisenhower がその第一期の大統領であった期間中には、このような追憶固定症状 memory fixation が起ることはなかったのである。しかも、かの女はそのときにも Eisenhower に票を投じていたという点では変わりはなかったのである。かれの第一期の当選が報ぜられたときは、かの女は完全に relaxation を得ていた。というのも、かの女の最初の投票はまさしく「共和党員」としてのものであったからである。しかるに第二回目の投票は、実に independent voter としての投票をなしていたのであった。すなわち、共和党員であったかの女の父親はこの二つの選挙のあいだに死亡し、そのため父を失った後のかの女は「民主党」の運動員の強い影響力にさらされつづけることになったからである。

Brodbeck は、人の、「自己」にたいするあるいは支持した候補者や党にたいする批判眼は、全身全霊をうちこんだ支持を投票という行為をとうしてあたえたという、まさにその行為そのもののなかで確かなものとなる、と考える。そしてさらに、政治的対抗者にたいする敵愾心をいたずらにかきたてることよりも、むしろ、それを正しく評価することの方が、このような total voting response を形成する要素としては重要なものとなる、と論ずるのである。

(B)

われわれが次にのべようとすることがらは、心理療法学の産出した原理の一つについてである。というのも、これは Brodbeck の論文のなかに流れている第二のテーマを構成するものであるし、また、かれは「多くの場合、理論化されているわけでもなく、therapist によっても見ずみ⁽⁵⁾なれているものであるが、psychotherapy のうちには多くの進行している『選挙運動、electioneering が存在している』とのべ、それを基礎にすれば、選挙の研究をすすめるのに有利であると考えているからである。ところが、かれの提示しようとしていることがらは、実は、その逆の関係、つまり選挙運動のなかに多くの psychotherapy が存在するとういことなのである。そこで、もし、こういった Brodbeck の所論をたぐってみるならば、われわれは、本稿で問題にしている民主政治の健全性と、これを支える市民の（健全な）資質とを連結する道すじについて、何らかの示唆が得られはしまいかと思われるのである。

Brodbeck はこの論文のなかで “Selective Inattention” and politics というタイトルを付した一節をもうけている⁽⁶⁾。この Selective Inattention —— 選択的不注意——という概念は、いうまでもなく、アメリカの生んだ精神医学者である Harry Stack Sullivan の創始にかかわるものである。かれはアメリカ近代精神医学を確立した Adolf Meyer の流れをくむ W. White の弟子にあたるが、初めは Sigmund Freud の仮説の影響をうけつつも、のちにそれとは異なる体系の独自の理論を展開した。そして R. Benedict, W. I. Thomas, E. Sapir などと協力して Multi-disciplinary group を形成し、K. Horney, E. Fromm, A. Kardiner などの Neo-Freudian といわれる新しい精神分析学派にたいし理論的貢献をなしたことで知られているのである。Sullivan によれば、あらゆる人間の行為は、身体的要求である “満足の

追求、need for satisfaction と、本来、文化的なものである。『安全性の追求、need for security』という基本的概念に分類される。この両者は、実際には、密接に結びついているものであるが、『安全性の追求』は『満足の追求』のもとになっている衝動を経験によって教育し文化的に訓練してきた人間が作りあげたものといえるのである。Freud 以後、体系的なパースナリティ発達論をみせたのは Sullivan をもって初めとするが、かれは自らの理論を『対人関係の理論』とよんでいる。次にその理論の概略をのべておこう。⁽⁷⁾

およそ乳児の出生以降はじめてもたれる対人関係は、養育者——母親——とのそれである。そして乳児は、いまだ感情表出をなし得ないときにおいてすら、すでにこういった養育者 Significant Person or Significant Others の、社会的・文化的に条件づけられた態度から何らかの（文化的）影響を感じとるのである。Sullivan はこの態様の伝導作用を Empathy とよぶ。養育者の不安や怒りや否認はこの Empathy という作用を通して乳児に伝わり、乳児は、Euphoria とよばれる全く緊張のない穏かな心的状況から、しだいに不安の満ちた世界に移行してゆくことになる。それ以降、人は文化のもとめる方向に積極的に馴化させられるというプロセスをたどるのである。是認や否認はこの教育過程の構成部分である。そして是認は人に安寧感をもたらし否認は不安を惹起させるが、この不安の経験が人間の意識 awareness を拘束したり制禦したりすることによって、それを成長せしめたり制限したりするのである。Sullivan は人間の心は、ある行為が是認されるかないしは否認されるかといった、かぎられた範囲にかんしてだけこまかく見ることができ、ほかの部分には注意がゆきとどかないものである、とする。不安は、本来、制約的に作用する力であるから、こうした注意の範囲を狭めるといふ効果をもつ。だから人間の心の大部分は注意されないままになっている、といえる。こうした Freud が無意識とよん

だようなものを、Sullivan は selective inattention とか dissociation とよぶが、その語の用法は前者とことなつてむしろ機能的な意味をとる。ともあれ、不安は自己の形成にさいして潜在的な力をもつてはいるものの、しかし、それは制約的にのみ作用する力といえるのである。だから、人は不安の状態にあるときには、充分な観察をなすことができず、その識別力は減退する。すなわち知識の獲得と理解にさいし、それは障害となる力である。つまり、このような場合、人は結果する状況を正確に把握できず予見能力を失なうことになるのである。

Sullivan は患者たちに心理療法をほどこしているうちに、かれらは自らの人生史のなかでしばしば重要な経験が起つていたのにもかかわらず、それらを生かして人生に役立たせることをしていないということに気づいた。かれらは、経験から学習するのではなく、むしろ、それらを拒否する技術を身につけていたようにすら見えるのであった。その経験の内的ないし外的な側面は、患者にとって認識されないままに過ぎていつてしまう。その態様は、あたかも生活過程のある部分にたいする蔑視でさえあるようにみえた。しかし、この認識の欠落によって通りすぎってしまった経験の部分が、実際にはこのような個人たちの追求しているゴールと充分に関係があつたのである。それゆえに、このような selective inattention にたいしかれらが支払つた代償は、その人にとって重要な動機を満足させたり、実りあるものを獲得させたりすることが、部分的でないし全面的に、できなくなつてしまう、ということだつた。かれらが、こうした経験の側面を蔑視して認識の欠落症状をおこしたのは、実は、この側面の経験がかれらにとって強度の不安を惹起させるあるものを、つまり、かれらの自尊心にたいする脅威となる力を有していたからである。しかもこれらの経験は、変形したものとなつており、きれぎれの形でしか想起することができないようなものとなつていた。それゆえ、患者にたいしこれらを気づかせるといふことは

技術的にも困難な問題を含んでいた。臨床医としての Sullivan の卓抜性は、この難問を見事に解決した点にあったといえる。

かれの治療法の要部は、したがって、患者の自尊心を治療期間中かなり高度にたえず保ちつづけるということである。これは患者の不安の度合いをひくめるという効果をもつし、また、人は安全だと感じているときには、そうでないときと比べて、選択不注意態様ははっきりしてくるものだからである。そこから Sullivan は、すべての therapeutic な活動における技法の第一義とするものは、他人に快適感をあたえたり、尊重されているとか尊敬されているという感じをおこさせる能力であるとする。もしこのような巧みさに欠けているとするならば、たとい知的に明敏であっても、直観力がすぐれていても、therapist は、社会的事実について患者がパースナリティをより大きく統合するために、助力をあたえることはできないと考えるのである。

註(1) American Voting Behavior, Chapter 22.

(2) *ibid.*, p. 420.

(3) *ibid.*, p.p. 417~419.

(4) *ibid.*, p. 419.

(5) *ibid.*, p. 423.

(6) *ibid.*, p. 425.

(7) Harry Stack Sullivan の著書は *Conceptions of Modern Psychiatry*, 1947. のみがあるといつてよく、ためにかれの思索を理解するには精神医学雑誌に発表した論文によらねばならぬので、その体系の記述は特に困難であるとされている。本稿における Sullivan の理論の要約は以下の文献にすぎた。Gerald S. Blum; *Psychoanalytic Theories of Personality*, 1953. T. A. C. Brown; *Freud And The Post-Freudians*, (牛津・大羽共訳、フローレンス訳) Clara Thompson; *Psychoanalysis, Evolu-*

tion and Development, 1951 (縣田訳、精神分析の發達)、丸井文男、臨床的人格学——サリヴァンの理論を中心として——(松本金寿編、現代心理学体系七、村松常雄編著、臨床心理学所収)。

(四)

Brodbeck は、この selective inattention という概念をさらにくだいて理解しやすいものとするために「十九世紀的概念である irrationality」と類比しながらのべるが、実はそのなかに、かれの民主政治の健全性とそれをささえる市民の健全な資質にたいする考え方があらわれてくるのである。かれは以下のようにのべている。¹⁾「わたくしは、別の論文で“irrationality”を次のように定義しておいた。つまり irrationality とは、人が自分の価値を実現するためにはどういふふうにするのが、一そうヨリよい方法なのかということを学習する能力に欠けていること、とした。一そうよい方法とは、勿論、ヨリ巧妙に、ということの意味するものであるが、加えて、そこには、あらゆるものが継続的に成長し発展するという方向にむかうのに他人や自己をそこねることなくそうする、というファクターがあるのである。選択的不注意 selective inattention をなす人は irrationally に行動する。そして、その語を使用するさいにわたくしは二つの意味をもたせる。その一つは、不注意 inattention のひろがりがどのように限定されているかあるいは拡大されるかによって、その irrationality は、社会的関係というネットワークのなかに統合されている人々に、また、その irrationality にさらされはじめた人々に、確実に害をあたえるものとなりうる、ということである。そのときの、もう一つの意味は、irrationality はデモクラシーの条件と矛盾するものたらざるをえない、ということである。なぜならば、相互的対人関係状況の中

にふくまれているファクターのあるものを独裁者的に蔑視するというのが、irrationality の要部だからである。」と。

つまり、かれのいおうとしている民主政治の健全性とは、その社会の構成員の選択的不注意態様と大いに関係がある、ということである。個々の構成員の不安感が減ずれば、選択的不注意態様の頻度は減少し、その社会はより健全なものとなるが、何らかの理由で、構成員の不安が増強されれば、選択的不注意態様が増加し、デモクラシーに反する状況があらわれる。したがって、民主政治の健全性と市民の健全な資質とは、選択的不注意 selective inattention を媒介して互いに関係を有する、ということになる。そして、これを基礎として Brodbeck の政治論が展開されるのであるが次にその二・三のものを要約してみよう。

たとえば、かれは、アメリカ人の社会では、権力をもっている人々あるいは権力的地位を得ようとしている人々を、邪悪な非民主的な意図を有する人間とみなし、権力は人間を高尚なものにするという考え方をとらない傾向がある、つまり、権力的状況には人格の最善の面をひきだし、これを明らかにするという側面がふくまれているということを、仮説としても事実としても言明するための条件を精査することはなく、むしろ、権力はもっぱら墮落し腐敗するものとしてしかみていない、だが、実はこういう観方をするということこそが、かえって“自己”を防衛しなければならぬような状況を現出させる力となっている、とする。⁽²⁾ たしかに、民主政治においては政治的リーダーシップを決定するのは選挙を通じてなされるのであるから、権力はもっぱら腐敗墮落するという側面しかみないとすれば、このことは権力の究極的源泉である個々の市民自体を蔑視すること以外の何ものでもないといえようし、したがって、その投票行動のなかにはぬきがたきほどの選択的不注意態様の存在を意味することになってしまふであらう。

また、かれは、アメリカの二大政党は共通の民主的な目標にかなする綱領の上に立っているが、ある党の立候補者は、それを支持するものないし支持せぬものにあたいし、もし selective inattention を強いるならば、かれはまさにアメリカの民主制をほりくずしていることになるけれども、ある党や候補者が、一つの民主的な社会において、それを支持しないものには無論のこと、支持するものにも存在する イッシュューズにたいする selective inattention を減ずるようなやり方で機能できないはずはないとし、もし、そうあることができるならば、かれのないしかれの党は、わだかまりのない民主的な慣行を発見するのに創造的に従事していることになる、とのべているのである。⁽³⁾そして、民主政治にあたいし、何故に高い尊敬が払われることができるのかは、第一に公衆を教育するために、そして、第二に投票者たちのあいだに存在する選択的不注意態様としてあらわれる「諸抵抗」を処理するために、いろいろなキャンペーンを用いることができるという点に拠っているのである、しかし、政治的リーダーたちは、自分たちを支持しているものあるいは支持していないもののあいだに存在する選択的不注意態様を弱めるために、その才幹の半分でも用いるという努力を一向にしようとしなくて、かえって、これらの選択的不注意要因を強めたり、利用したりしているというのが現状である、とする。⁽⁴⁾

さらに、従前の投票行動研究書によれば、選挙民のあいだに大規模なアパシーが存在しているという報告がなされているが、その起因するところは、かれらが事実を吸収する能力に欠けているということではなくして、これをええようとするならば容易に変えることができるはずの、しかしより重要な意味をもった、制約的条件によるのである、つまり、人々を説得するのに Madison Avenue 流のテクニク以外の異なったやり方ではとてもおぼつかない、と信じこんでいる政治的リーダーたちのもたらした倦怠感に起因する、と Brodbeck はいう。⁽⁵⁾たしかに、むかしと比べれば現代はその制度もあ

るいは決定すべきことがらも、すべて複雑になっているではあるが、そのなかにあつて、やはり人々をして選択的不注意ではない態様で（政治的に）思惟するものたらしめることが必要であり、またこれだけが“Mass Society”への進行をくいとめるのを可能ならしめるであらう。

アメリカ人の権力にたいする観方、民主的なリーダーの必要とされる資質、国民のアパシーの期成因およびこれらの生み出すであろう諸結果などについて、Brobeck が論じきたったところはいずれも selective inattention 概念を基軸としてすめられたものであつた。そしてつぎにかれは、われわれに Sullivan の治療法の要部——個人の安全感が増大するにつれて、その選択的不注意のシステムは観察者にとつて明らかになってくる——を想起させ、政治的キャンペーンの研究にとつて、このことは瞠目すべき含意を有する、とするのである。すなわち、ある党の指導者や一般の黨員たちは、多数の得票を得てかれらが国民によつて受けいれられ選出されるということ、より確かなものと感じはじめると、それまでは不安がひきおこされる故に注意を払う用意をしていなかったところの、あの政治的イシューの部分、かれらによつて明らかに宣べられるようになる、つまり、その党にとつて、本来やっかいなことであるイシューにたいしてでも、これを意識にのぼらせ真剣にとりくみはじめるようになるのだが、これはあたかも心理療法のなかで現われる治療経過が、政治的キャンペーンにおいても同一の法則にしたがつて現われるということをしめすものだ、とするのである。⁽⁶⁾

Brobeck の論は、心理療法の、政治的なあるいは民主的な性質を定立しつつ、これを選挙過程と結びつける試みをなすものであつた、といえる。かれは therapist は選挙運動の場合とはことなり、いかなる政策も唱導することはないけれども、それにもかかわらず患者の心の内部には進行している power-struggle が存在するのであつて、したがつて、政策の

示唆こそはさし控えていても、依然として therapist はかれが判断する独特のやり方で、患者が直面している問題を合理的に解決するためにその力をかすのである、だから、心理療法のなかには一種の政治教育が存在することになるが、それは患者をして人生から欲するところのものを獲得するに、社会性をもった有能な人間たらしめようとするのが主眼目である、とする。⁽⁸⁾このような観点に立って、かれは、政治的リーダーたらずは投票者のあいだに存する選択的不注意態様を現実には減少させていない、として鋭く批判しつつ、一方では、このことを可能にするような、つまり心理療法の技術に類比すべき、選挙運動の科学のための技術 techniques for the science of electioneering を修得すべし、という提唱をなして⁽⁹⁾もいるのである。

精神分析はパースナリティの潜在的な意識の抑圧された面や、強健ならざる、蔑視されたる面にたいし、より大きな尊敬をあたえ正確な聴取をあたえるという着想に依っており、同時にその参加者の self-images がそこで互いに挑戦をうけてテストされる自由なフォーラムという着想を実現するものである。その意味では、精神分析の実際は理念的には民主政治の原理と充分に一致するものであろう。⁽¹⁰⁾そしてこのことが、Brodebeck をして、心理療法の科学と選挙運動の科学とのあいだの基本的な並列関係を、さまざまな議論を通してひきだそうという試みにみちびいたのもあろう。かれの投票行動の心理学的検討という議論は、これをささえている政治的健康性の概念や、支配するものと支配されるものとのあいだの関係についての思索を、さらにリファインすることの必要性は充分にあると思われるけれども、最も non-political なアプローチをもってして、なお、その論は心理療法的経験の範囲にとどまらず政治的なものとの融合をはかろうとした点で注目に値いするといえる。

註(一) A. J. Brodbeck, The Principles of Permanence and Change: Electioneering and Psychotherapy Compared, *American Vo-*

ting Behavior p. 428.

(2) *ibid.*, p.p. 428~429.

(3) *ibid.*, p. 429.

(4) *ibid.*, p. 430.

(5) *ibid.*, p. 432.

(6) *ibid.*, p.p. 432~433.

(7) *ibid.*, p. 420.

(8) *ibid.*, p. 434.

(9) *ibid.*, p. 429.

(10) *ibid.*, p. 435.